

神奈川県におけるカオグロガビチョウの 野生化について

中村一恵・室伏友三・足立陸子・初瀬川孝夫

Kazue NAKAMURA, Yuzo MUROFUSHI, Kugako ADACHI & Takao HATSUSEGAWA:
A Note on the Naturalization of the Masked Laughing Thrush,
Garrulax perspicillatus (GMELIN), in Kanagawa Prefecture

Abstract: A newly introduced cage birds, masked laughing thrush (*Garrulax perspicillatus*), which were the first identified at Sagami-hara City in 1979, have been regularly discovered in Kanagawa Prefecture since the last 1980's. This species appears to have released deliberately by some unknown person. It was reported that the birds have bred in some urban areas of Kanagawa Prefecture.

はじめに

チメドリ科のカオグロガビチョウ (*Garrulax perspicillatus* (GMELIN)) は、揚子江以南の中国中南部からヴェトナム北部にかけて生息し、本来日本には分布しない鳥であるが、1988年に三浦半島の小松ヶ池で成鳥2羽が観察され、神奈川県から初めての記録として報告された(中村, 1989)。日本産カオグロガビチョウの由来は不明であるが、チメドリ科の鳥は本来大きな移動は行わず、また、本科の鳥が日本産に一種もないことから、原産地から自力による飛来は考えにくく、したがって輸入されたものが放たれたか、逸出して野生化したものであろう。これまで移入種としてのガビチョウ類 (*Garrulax*) は世界で8種記録されている (LONG, 1981) が、本種の移入例は新記録である。

その後もカオグロガビチョウは神奈川県各地から報告され (和田, 1991; 石井, 1992; 日本野鳥の会神奈川支部, 1992)、さらに筆者らのうち、中村と足立により1992年に大和市においても繁殖が確認された。一方、室伏と初瀬川は小田原地区で本種を数カ所で観察・記録していた。そこで、本種の新しい記録を報告するとともに、これまでの記録を整理して、神奈川県にお

ける生息現状をまとめた。

記録をまとめるに当たって、横浜市立野毛山動物園の白石利郎氏並びに日本野鳥の会神奈川支部の鈴木茂也氏から多大なご協力をいただいた。記して御礼申し上げる。

大和市における記録

筆者の一人足立は、1992年8月18日に大和市下鶴間のつきみ野地区で3羽のカオグロガビチョウを観察し、この群れの一部を写真に収めることができた (図1-a)。さらに同日、ここより1km南に位置する大和市下鶴間の南林間地区で雛連れの番いを観察した。これを受けて同年8月22日、筆者の一人中村は足立の案内により現地調査を行い、前者の地区で3羽、後者の地区で4羽のカオグロガビチョウの生息を認めることができた。足立は、同年の春、つきみ野地区で7羽のカオグロガビチョウの群れを観察し、前年にも本種と思われる声を聞いているが、1988年から89年にかけて実施された大和市の鳥類調査の結果では、本種は記録されていない (足立他, 1990) ことから、ごく近年の野生化と考えられる。

成鳥の形態の特徴および鳴声が、以下に記すカオグロガビチョウの特徴 (中村, 1989) に合致し、大和市の個体は本種と判断された。

前頭から眼の回りが黒く、あたかもマスクをかけたように見える。嘴は黒っぽい。頭頂、頸、喉から上胸にかけて灰褐色、残りの背面は鈍い褐色。下胸は上胸より淡く、褐色を帯びるパフ色。尾は円尾で長く、オリーブ褐色で外側と先端が黒味を帯びる。下尾筒は明るい茶褐色。鳴声はピョッ、ピョッ、キョッ、キョッとよく通る。



図1-a. カオグロガビチョウの成鳥（左）と若鳥（撮影・足立），
1-b. 雛（撮影・中村）．いずれも大和市下鶴間

表1. 神奈川県におけるカオグロガビチョウの記録一覧

No.観察年月日	観察場所	羽 数	観察者
1. 1979. 10. 17	相模原市磯部と下溝境界付近	1	鈴木茂也
2. 1987. 6. 12	小田原市東町・酒匂川河口	6	室伏友三
3. 1988	相模原市上鶴間	5(雛)	和田(1991)
4. 1988. 9. 10	三浦市南下浦町上宮田小松ヶ池	2	中村(1989)
5. 1989. 2. 4	小田原市西酒匂(酒匂中学グラウンド)	4	室伏友三
6. 1989. 8. 10~9. 20	南足柄市岩原	4	掘田修史
7. 1989. 9. 14	小田原市西酒匂・酒匂川河口	7	室伏友三
8. 1989 12. 17	相模原市磯部相模川	3	朝日豊彦
9. 1990. 1. 4	中郡二宮町	2	室伏友三
10. 1990. 4. 19	小田原市府川	3(1羽幼鳥?)	頼ウメ子
11. 1990. 3. 6	酒匂川と狩川の合流点付近	3	室伏友三
12. 1990. 7	相模原市上鶴間	3(雛)	和田(1991)
13. 1990. 10. 9	相模原市磯部	5	藤井和子
14. 1991. 5. 24	南足柄市沼田	5	掘田修史
15. 1991. 7. 10	中郡二宮町川匂	2	石井(1992)
16. 1992. 3~4.	大和市下鶴間	7	足立陸子
17. 1992. 3. 3	小田原市羽尾	4~7	初瀬川孝夫
18. 1992. 5. 6	小田原市浜町	3	室伏友三
19. 1992. 8. 22	大和市下鶴間	7(若鳥1,雛1)	中村一恵

記録 6,8,10,13~14は日本野鳥の会神奈川支部(1992)による



図2. 大和市下鶴間におけるカオグロガビチョウの繁殖環境(撮影・中村)

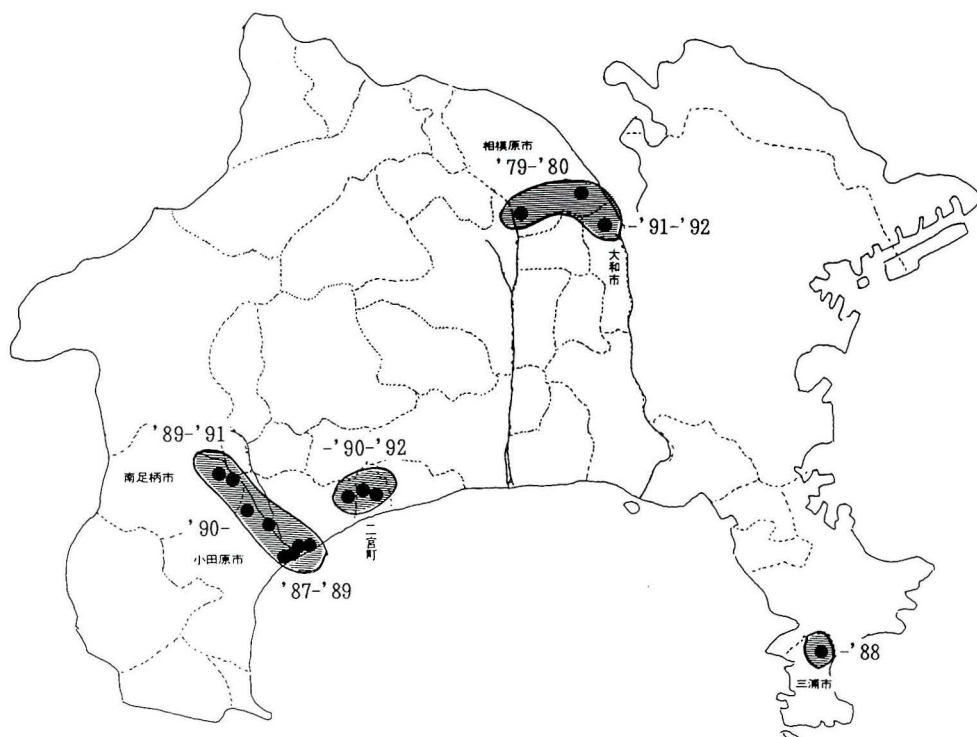


図3. 神奈川県におけるカオグロガビチョウの分布(1992年現在). 数字は発見年を示す

つきみ野地区の3羽は番いの2羽と、おそらくはその子供と思われる若鳥で、8月22日の観察では親と鳴き交わす行動は認められたが、親から独立した状態になっていた。図1-aに示した写真左側の個体が親のうちの1羽で、尾羽が十分に伸びきっていないこと、成鳥にある前頭頸からにかけての灰褐色が鈍いところから、右の個体は若い個体で、その子供と思われる。下鶴間地区の番いは2羽の雛を連れていた。雛は巣立つ間もないものと思われ、親から給餌を受けていた(図1-b)。親鳥が地上から3センチ程度のケムシを二度捕らえ、雛に運ぶのを目撃した。また、雛に与えるためと思われたが、親鳥がアブラゼミを追うのを二度目撃した。

大和市における繁殖の確認は和田（1991）に次いで県下における第3例目に当る。大和市（表1, No.19）における生息環境を図2に示す。本種の生息場所は、人家、畑、竹藪、果樹園などがモザイク的に入り組んだ環境で、後述する原産地に似た環境を選択している。相模原市上鶴間での繁殖例では、篠竹の藪の中に営巣した（和田 1991）という。

繁殖生態・食性および分布について

本種のこれまでの記録を表1に示す，それらに基づいて作成した分布図を図3に示す。

記録地点は20例に満たず少ないが、西から南足柄市、小田原市、二宮町、相模原市、大和市、三浦市の6市町に及んでいる。それを整理すると、小田原市と南足柄市の酒匂川河口からその支流の狩川流域にかけての地域および小田原市西部と二宮町、相模原市と大和市、三浦半島の三浦市の三地域に不連続的に分布していることがわかる。現在のところ、山地（標高500m以上）からの報告例はない。

小田原・南足柄地区での最初の記録は、1987年の酒匂川河口における記録(表1, No.2)である。そして89年以降、支流の狩川流域で安定して観察されているが、一方、隣接する小田原西部・二宮地区では90年が最初の記録(表1, No.9)であり、それ以後、91年と92年の記録が出されている(表1, No.15, 17)。したがってこれらの地区へは酒匂川方面から分布を拡大したものに由来するものと推定される。

相模原・大和地区における最初の記録は、1979年の

相模原市磯部と下溝の境界付近の相模川からである(表1, No1)。鈴木茂也氏が観察・撮影された。同氏からそのときの写真をお送りいただいたが、間違いなく本種である。和田(1991)によれば、1980年頃から相模原市上鶴間で本種の鳴声を聞いたと言い、1988年にも雛5羽を確認したということである。

鈴木茂也氏の記録と、1980年頃から本種の鳴声を聞いたという和田哲夫氏の証言と時期的にはほぼ一致している。したがって相模原市に定着して繁殖したものが大和市北部へ分布を拡大したものと推定される。三浦市は1例のみで、その後も生息しているかどうかは情報を得ていない。

以上のような記録から、本種の野生化は1980年前後の頃であったと推定され、野生化しておよそ10年経過してその存在が目立つようになったと言えよう。分布が不連続的であるところから、飼い鳥の逸出というよりはむしろ、何者かによって複数カ所に放鳥された疑いが強い。

本種の中国名は七姉妹(seven sisters)で、原産地では平地の低木林や疎林地帯、アシ原、農耕地、人家周辺に住み、中国産ガビチョウ類(Garrulax)のうち、もっとも普通種の一つである。低木の樹上または竹藪などのブッシュに営巣し、1腹卵数は2~5卵。香港の例では、繁殖期は3月から8月で、年2回繁殖する(WALTERS,1980; VINEY & PHILLIPPS,1983; De SCHAUENSE,1984; CHEING,1987)。

本種の食性は、WALTERS(1980)によれば、昆虫、果実、種子であるが、本県において観察された食物も、筆者らの観察によるセミ、ケムシなどの昆虫類のほか、サンゴジュの実、サクランボ(堀田修史氏による)、カキやビワなどの果実(和田哲夫氏による)を食べた観察記録があり、雑食性である。

おわりに

大和市において確認された移入種・カオグログビチョウの繁殖について報告し、その繁殖生態・食性等についても簡単に触れ、神奈川県における分布現状について報告した。本種の食性、生息環境から判断して、既産地以外の地域に生息している可能性は高く、また野生化して10年余経過しているものと考えられる。分布拡大の速度はゆるやかであるが着実に広がっていると思われる。今後さらに県内で分布を広げることが予測される移入種であり、その動向に注目する必要がある。

文 献

- 足立陸子・石井深雪・梶谷謙太郎・桑原健次・浜口哲一・松野譲・渡利博, 1990. 大和市の鳥類. 大和市動植物調査報告書 I, pp.45-124. 大和市教育委員会.
- CHIEN,T.,1987. A synopsis of the avifauna of China. Science Press, Beijing.
- De SCHAUENSE, R.M. 1984. The birds of China. Oxford Univ. Press.
- 石井春江, 1992. フィールドノート・カオグログビチョウ. 野鳥, (543):51.
- LONG, J.L., 1981. Introduced birds of the world. David & Charles.
- 中村一恵, 1989. 変な鳥みつけた. はばたき, 日本野鳥の会神奈川支部報, (200):14.
- 日本野鳥の会神奈川支部, 1992. 神奈川の鳥1986-91-神奈川県鳥類目録Ⅱ. 日本野鳥の会神奈川支部.
- VINEY, C. and K. PHILLIPPS, 1983. Birds of Hong Kong. Government Printer, Hong Kong.
- 和田哲夫, 1991. 珍鳥「カオグログビチョウ」繁殖記. はばたき, 日本野鳥の会神奈川支部報, (220):8.
- WALTERS, M., 1980. The complete birds of the world. David & Charles.
- (中村一恵: 県立博物館, 室伏友三: 箱根明星中学校, 足立陸子: 日本野鳥の会神奈川支部, 初瀬川孝夫: 小田原市立橋中学校)